



# 京都大学 総合人間学部 広報

## 特集 読め！私がすすめるこの本

石原昭彦、上木直昌、大木 充、大澤真幸、鎌田浩毅、.....	2
河崎 靖、小山静子、菅原和孝、田邊玲子、富田博之、 富田恭彦、廣野由美子、三原弟平、宮下英明、森谷敏夫、 吉田 純、ヨリッセン エンゲルベルト	

## 卒業生からの声

総合人間学部で得たもの.....	早川 奈美.....	17
とりえのない自分にもできる仕事.....	内藤 尚志.....	18
生協のコピーカードは損か得か.....	早崎 永治.....	19
忍耐、努力、感謝.....	佐々木淳也.....	20

## 研究・教育活動紹介

私の研究歴・研究内容について(自己紹介に代えて).....	齋藤 治之.....	21
ゲニザ文書 エレツ・イスラエル学 ピユート研究.....	勝又 直也.....	22

## 特集

# 読め！私がすすめるこの本

今号では、読書をテーマに特集を組みました。学生みなさんにぜひ読んでもらいたい本を、人間・環境学研究科、総合人間学部の17名の先生方に紹介していただきました。専門分野での必読書や、人生において読むことを薦める本など、自由な形式で挙げていただきましたので、今後の読書プランの参考にしてください。 (五十音順)

### 石原 昭彦 (認知情報学系)

#### 1. 松村道一、小田伸午、石原昭彦 編著『脳百話』市村出版 (2003)

ここでは帝京平成大学情報学部の久米秀作先生の書評を紹介する。

この本の内容は、極めてユーモアのセンスに富んでいる。例えば、タイトルだけ追ってみると「黙って座ればぴたりと当たる 脳地図と脳機能地図」とか「宇宙で筋肉はどうなる」「休めば痩せる筋線維」「うさぎとかめの筋線維」、さらには「夢は目玉を駆け巡る REM睡眠の話」「アガる人・キレル人 感情の運動作用」など。この本の執筆者たちは相当“柔らかい脳”の持ち主である。本書にはこの他に「名人への道のり」と題した中枢の運動学習についての記載もある。それによると、中枢は訓練によって運動の効率化を“学習”するという。多分柔らかい脳の持ち主は、この効率化によって得た余裕をユーモアに当てるのであろう。是非本書に触れて“柔らかい脳”と“ユーモア”を学習してもらいたい。

専門性：                   、難易度：                   、おもしろさ：                   、理系および文系向き

#### 2. 白楽ロックビル『アメリカからさぐるバイオ研究者の動向と研究者』羊土社 (1999)

留学を志している理系の学生には是非とも読ん

でもらいたい。著者の独断と偏見で思いのままに書かれたような内容であるが、実際には「チョー優秀な科学者は誰か?」「最もホットなバイオ分野はどれだ!」「科学研究費はどーなってるのダ!」など詳細なデータや研究者へのインタビューなどに基づいた迫力のある興味を引く内容が多い。著者は“白楽ロックビル”という変わった名前を持つが、それに関する話もおもしろい。1999年の発行で古い本ではあるが十分に価値を見出せる。

専門性：                   、難易度：                   、おもしろさ：                   、理系向き

#### 3. 森谷敏夫『からだと心の健康づくり』中災防新書 (2001)

解りやすい、読みやすい、親しみを持てる本として是非とも薦めたい。この本を読まなければ、健康や体力を理解して実践することは難しく、高齢化社会を生き抜くこともできないだろう。この本は日常生活のちょっとした配慮で健康づくりができることを教えてくれる。巻末の森谷先生の爽やかな笑顔がこの本のすべてを物語っている。

専門性：                   、難易度：                   、おもしろさ：                   、理系および文系向き

#### 4. 鈴木英次『科学英語のセンスを磨く』化学同人 (1999)

英文論文を作成していると、“a”を使用するの

か“the”を使用するのか、“certainly” “probably” “likely”または“possibly”のどれが適切なのかを迷う。この本は優れた国際雑誌で使用されている論文内の単語を整理して、どの単語をどこでどのように使用するかヒントを与えてくれる。著書名の通り“科学英語”のセンスを磨くためには必読すべき本と思う。ただし、おもしろさは無い。

専門性：                   、難易度：                   、おもしろさ：                   、理系向き

(いしはら あきひこ)

## 上木 直昌 (認知情報学系)

まず大学生は教科書をしっかり読むことが大事ですが、教科書としてのみならず1冊の教養書として幅広い読者にお薦めしたいのが2回生向けの授業、「確率論基礎」の教科書としてよく使われる

河野敬雄『**確率概論**』京都大学学術出版会 (1999)

です。著者の河野先生は総合人間学部創立時からこの学部の教育に貢献してこられました。この4月に退官されたので、皆さんが先生の直接のご指導を受ける機会は通常では無くなりました。しかしこの本で先生は確率論の基礎的概念について軽快な語り口で説いておられますので、先生の楽しいお人柄を感じることが出来ます。その内容は数学に留まらず認知心理学、社会科学にまで及んでいて、数学が苦手な人も含めて幅広い読者の興味をそそると思います。

次に私が1回生向け少人数セミナーの教科書として使ったことがある、

数学セミナー編集部編『**数学100の問題**』日本評論社 (1999)

を挙げます。この本には数学の未解決の問題、古

くからの有名な問題等いろいろな問題が挙げられていて、考える楽しみを味わったり、勉強の目標を立てたりするのに良いと思います。数学の研究の進展に合わせてこの本は1984年に出版されて以来一度改訂されていますので、今後も改訂されていくことが期待されます。いつか貴方の名前も載るでしょうか。また同じ『数学100の』シリーズとして『数学100の定理』、『数学100の発見』、『100人の数学者』、『数学・物理100の方程式』等もあってこちらも面白いと思います。

次に私の専門との関わりでお薦めしたいのは米沢富美子『**ブラウン運動**』共立出版 (1987) です。ブラウン運動は高校では理科で習うと思いますが、これにヒントを得た数学的概念は数学のみならず、自然科学、社会科学の幅広い分野において非常に役に立ちます。例えば最近経済学で金融工学という分野が盛んですが、そこでは数学的なブラウン運動に基づいた株価の変動のモデルが1つの基礎になっています。この本ではその数学的な概念も含めたブラウン運動の基本的事柄が幅広い読者を対象にして語られていて、ブラウン運動について書いてある本のうち最も読みやすいものの1つと思います。

最後に最近読んだ本の中から少しショックを受けた

S・ナサー『**ビューティフル・マインド**』新潮社 (2002)

を挙げます。同じタイトルの映画が話題になりましたが、どちらも同じ数学者ナッシュの人生を題材にしています。但し映画は内容が削られて少し違った話になっています。ナッシュは数学に関しては超一流でノーベル経済学賞を受賞するのですが、長い間統合失調症に苦しみました。天才には憧れを感じるものですが、まずは心身の健康を大事にしなければならぬと改めて感じさせられます。

(うえき なおまさ)

## 大木 充（認知情報学系）

エドワード・L・デシ、リチャード・フラスト  
『人を伸ばす力 内発と自律のすすめ』新曜社

大学生活をどのように送るか、さらには将来どのような職業につくかということは、新入生のみならずにとっては大問題ですね。でも、とりあえずは自分に向いているのではないかと思われることをやってみることで。そして、それをする事自体が楽しく感じられるのならしめたものです。なぜしめたものかは、この本を読めばわかります。この本は、「自己決定理論」という動機づけに関する心理学の理論をやさしく解説したものです。たとえ楽しいことであっても、目標を達成できずにくじけそうになることもあります。この理論の提唱者DeciとRyanによると、「やる気」を高め、維持するには人間が生まれながらにして持っている3つの基本的欲求を満たす必要があります。自分が有能であること（有能感）、決定をしているのは自分であること（自己決定感・自律性）、自分は他の人に大切に思われていること（他者受容感）が感じられるようにする必要があります。本を読んでこの理論をさらに知りたいと思った人は、この理論のオフィシャルサイト（<http://www.psych.rochester.edu/SDT/>）に是非アクセスしてみてください。

この本には、「人は管理されることに適応すると、自律的になる機会という人間の本质に不可欠なものを望まないかのようにふるまうのである」とも書いてあります。人に教えてもらうことの大好きな「お勉強少年・少女」は要注意！京大生にたくさんいます。「やる気」があれば、たいいていことは「自律学習」できるのです。大学はそのための「環境」を提供してくれるところにすぎないのです。最後に一言、自分の有能感を満たすた

めだけに授業をしている教師、アメとムチの成果主義を導入しようとしている大学人もこの本を「読め！」

日本フランス語教育学会編『フランス語で広がる世界 123人の仲間 Moi aussi, je parle français』駿河台出版社

この本にはさまざまな分野でフランス語を使って第一線で活躍している（していた）123人の日本人に対するインタビューやエッセイがおさめられています。「フランスに来たことにより、私は日本がいかにかアメリカナイズされているかということをよく理解でき、同時にそれを日本の問題として感じました。グローバリゼーションにより、世界の価値観が画一化される傾向にあります。...フランス語は私に世界の多極性、多様性というグローバルな視点を与えてくれたといえるでしょう」（パリの大学病院の研究者）など、いずれも現場の生の声だけにずしりと重い。道具としての英語の需要に押されて弱気になっているフランス語の教師もこの本を「読め！」

S. I. ハヤカワ『思考と行動における言語』岩波書店

本を読むときも、人の話を聞くときも、たえず気をつけなければならないことは「ことばは物（そのもの）ではない、地図は現地ではない」ということです。ちょっといわくつき本ですが、言葉の呪縛から解放されて正しい判断力をつけるためにはいい本です。「一般意味論の最良の入門書として、刊行以来半世紀近く、広くよみつがれてきた古典的名著」という岩波書店の宣伝文句もうのみにしないことです。もちろんここに私の書いたことも。学生は批判精神を養うためにこの本を「読め！」

（おおき みつる）

## 大澤 真幸（国際文明学系）

真木悠介『時間の比較社会学』岩波現代文庫

廣松渉『世界の共同主観的存在構造』講談社現代文庫

柄谷行人『探究1・2』講談社現代文庫

カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』太田出版

ジョルジョ・アガンベン『アウシュヴィッツの残りのもの』月曜社

フリードリヒ・ニーチェ『ツァラトウストラ』ちくま学芸文庫

ジョージ・スペンサー＝ブラウン『形式の法則』朝日出版社

は、「社会学」の力を感得させる傑作。読者は、人生の深刻な問題がいかにして学問の主題となりうるかを知ることになるだろう。『気流が鳴る音』『宮沢賢治』等の、同じ著者による他の本も併読されたい。廣松渉は、戦後日本の思索家の中で、（哲学研究者ではなくて）「哲学者」と見なし得る数少ない人の一人。は、比較的若い頃の代表作で、彼の哲学の最も良質な部分を凝縮させている。これを通じて、「哲学する」ということが、どういうことかを学ぶことができるだろう。柄谷は、もちろん、現在の日本で最も影響力のある文芸批評家。は、「教える 学ぶ」という社会関係に着目することで、彼の思索の転回点を画した著作。『資本論』をはじめとして、マルクスの重要著作は数多あるが、短くて読み易い を挙げておこう。これは、ナポレオン三世がいかにして権力を握ったかを社会学的に分析する論考で、現代社会を読み解くためのいくつかの示唆が含まれている。アガンベンは、現代イタリアの政治哲学者。ナチスによるユダヤ人虐殺を扱った本は実にたくさんあるが、私の知る限り、 が最も理論

的で深い。アウシュヴィッツの問題を、「語る」ということがどのような逆説を孕むのか たとえば私たちは自分のことを語ることに気恥ずかしさを覚えるが、それはどうしてなのか という普遍的な主題に繋げている。は、若き日の私自身にとって、きわめて重要な意味をもった本なので、挙げておいた。は数学書で、たいへんな奇書である（私も訳者の一人）。数学自体は易しく、特別な知識を前提にしていない（文科系の人でも簡単に読むことができる）。われわれの経験のエッセンスを数学的に表現したときにどうなるかを示したもので、本文とあまり長さが変わらない「註」が、含蓄に富んでいておもしろい。

（おおさわ まさち）

## 鎌田 浩毅（自然科学系）

デカルト『方法序説』岩波文庫

「当たり前と思っている常識こそ、疑ってみる必要がある。」デカルトは優秀な成績で学校を終えると、学問を捨てて旅に出てしまった。副題の「理性を正しく導き、真理を求めるための」方法を見つけるためには、固定観念に満ちた多くの本を捨てる必要があったのだ。ここには、科学する精神の原点がある。

ショーペンハウエル『読書について』岩波文庫

「読書は、他人にものを考えてもらうことである。読書にいそむかぎり、我々の頭は他人の思想の運動場にすぎない。」読書は酒をたしなむのと似ている。酒は飲むものであって、飲まれてはいけない。同様に、本に「読まれて」しまつては、何にもならない。皮肉に満ちた書きっぷりの中に、真実がある。

ワトソン『二重らせん』講談社文庫

DNAの二重らせん構造の解明は、二十世紀最

大の科学的成果のひとつである。発見の前には激しい先陣争いがあり、それを制した著者はノーベル医学生理学賞を獲得した。自然の不思議と科学者の生態を見事に描いたノンフィクション。

立花 隆 『「知」のソフトウェア』講談社現代新書

人の頭は、コンピュータがまねのできない創造的な働きをする。本書は、アイデアを生み出す方法を、執筆の現場から論じた名著。無意識の巨大な潜在力に着目した点が秀逸。

湯川秀樹 『旅人 ある物理学者の回想』角川文庫

京大の生んだノーベル賞物理学者の自伝的エッセー。京都の美しい四季に包まれながら、じっくりともの考えていった生きざまを味わってほしい。科学研究にも「情緒」が重要なのである。

藤本隆宏 『能力構築競争』中公新書

わが国随一の経営学者が、自動車産業の現場を徹底的に分析した。国際競争力の源泉は、ものを造るときに生じた問題をただちに解決する仕組みにある。「能力構築競争」は全ての分野で起きている現象である。ビジネス感覚を若いうちから養うために絶好の本。

ポール・ロシター 『FIRST MOVES』東京大学出版会

日本語を使わずに英語の書きかた (academic writing) を会得する新しいタイプの本。英語で考える方法も実践的に学ぶことができる。自分の考えを論理的に伝える手段を身につけておくことは、文系理系を問わず必須である。

野口晴哉 『風邪の効用』ちくま文庫

風邪という誰でもかかる病気を扱いながら、体に関する深い洞察が述べられている。薬を飲んで治そうとしてはいけない。風邪がすなおに経過すれば、前よりも健康になる。身体という宇宙を考える上で、画期的な本である。

中谷彰宏 『大学時代しなければならない50の

こと』PHP文庫

大学は出会いの場である。好きな学問と気に入った教師に巡り会うのがポイントだ。何に出会ってどう学べばよいかについて、著者は平易な文体で鮮やかに指南する。

鎌田浩毅 『火山はすごい』PHP新書

火山に出会って私の人生は180度変わった。火山は人間をはるかに超える現象である。一人の落ちこぼれが研究に目ざめて、火山に没頭するさまを熱く語ったのが、本書である。同時に、自然に対する畏敬の念もぜひ感じてほしい。

(かまた ひろき)

## 河崎 靖 (認知情報学系)

### 1. 旧約・新約 『聖書』

知識として『聖書』のことをよく知っておくことはやはり肝要であろうが、今の時代にあっては『聖書』にアクセスする方法も多種多様になってきた。テキストとして標準的とされる「新共同訳」の全文 (旧約続編) を収め、インターネット上から一挙にダウンロードが可能なデータベースとしての『聖書』に『Jnet-バイブル』がある (<http://www.jbible.net>)。1,000円を支払いライセンスキーを取得すれば、いろいろな機能を活用することができる。

### 2. 『古事記』・『日本書紀』

このところまた『記紀』(特に『古事記』)関係の書物の出版が相次いでいる。しかも、よく売れているという。ここまで人を惹きつける魅力とは一体何なのか。『記紀』を読む読み方は、歴史書として、あるいは、一種のミステリーとして等、読者に任されるが、手始めに、三浦佑之訳・注釈『口語訳 古事記』(2002) または同著者による

『古事記講義』(2003)(いずれも文藝春秋) あるいは、HP「邪馬台国大研究」<http://www.inoues.net/yamataikoku/>(井上氏作)あたりからアプローチをはかるのがいいのではないかと思われる。

3. 東郷雄二『文科系必修研究生活術』夏目書房(2000)、『独学の技術』ちくま新書(2002)

両著書を通して筆者が言わんとしていることは、文系の場合でも「知」の修得には技術(スキル)が要するという側面があるということである。読書術・図書館活用術・パソコン術・留学术といった勉強の仕方のノウハウを項目立てて明快にわかりやすく解説し、そのテクニックを実践するための情報をふんだんに提供してくれる好著と言えよう。

(かわさき やすし)

## 小山 静子(人間科学系)

本を読んでいて楽しいと思う瞬間はどのくらいのときだろうか。わたしの場合は、思ってもみなかった考え方に会い、それまでわたしがもっていた価値観やものの見方が揺さぶられるときである。本を通して別の考え方を知るといことと、それに同調するということとは違うが、それでもこういう見方もあったんだと知るとはとても嬉しい。というわけで、学生のみなさんにもいろいろなものを見方があることを知ってもらいたくて、わたしの研究に近い領域、つまり教育学・日本史・ジェンダー論からいくつかの本を紹介したいと思う。

今津孝次郎・樋田大二郎編『教育言説をどう読むか』新曜社(1997)

「子どもの個性尊重」「心の理解」など、教育を語る言葉はどこか胡散臭く、空疎だと思ふときがある。本書は9人の手になる論文集であるが、教

育を語ることばのしくみとはたらきを考察することを通して、教育の論じ方自体を問い直している。

小塩隆士『教育を経済学で考える』日本評論社(2003)

教育学者は、どうしても教育を人間形成や子どもの成長という観点から考えてしまう。それに対して、このような教育に対する思い入れから離れたところで、経済学の言葉で社会的営みとしての教育を語っているのが本書である。

渡辺京二『逝きし世の面影』葦書房(1998)

幕末から明治初期に来日した数多くの外国人が残した記録を分析することを通して、当の日本人が気づいていなかった文明のありようを浮き彫りにしている。

坂野潤治『昭和史の決定的瞬間』ちくま新書(2004)

坂野潤治の本はどれも面白いが、これは最新のもの。「15年戦争」という言い方があるせいか、学生のみなさんはこの15年間を「戦争中」と一括りにしてとらえがちである。本書にはそれとは違ったとらえ方が提示されている。

落合恵美子『21世紀家族へ(第3版)』有斐閣(2004)

「家族は危機だ」と言われるようになってから久しい。でもそこで想定されている家族とは何なのか。その歴史的成立を語ることでわたしたちが当たり前だと思っている家族のあり方を相対化し、家族の変動を論じている。

荻野美穂『ジェンダー化される身体』勁草書房(2002)

身体は「与件」あるいは「本質」としてとらえられがちである。しかし本書は、性の二元制のもとでのジェンダー化された身体にこだわり、性差をもつ身体をめぐる言説や実践がどのように変化してきたのか歴史的に論じている。

(こやま しずこ)

## 菅原 和孝（文化環境学系）

私の専門は人類学だが、この分野の専門書ではなく小説のことを書きたい。小説こそが思考と想像力を養う最良の糧である。たくさんの大好きな小説のことを書いたら、何ページあっても足りないの、青年期と現在を架橋するような作品だけに限定する。

小学生のころ繰り返し読んでボロボロになった本がいまも手もとにある。コナン・ドイル著『**失われた世界**』（大日本雄弁会講談社、昭和32年刊）、少年少女むけの世界名作全集の1巻であった。この本の訳者解説が子ども心に奇妙な不安感を刻みこんだ。「未開人だって、人類です。文明はひくくても、それぞれの社会があって、平和をたのしんでいます。ヨーロッパ人は、かたっぱしからそれを破壊していったのです。」いま読みかえすとちょっと差別的だけど、堂々たるコロニアリズム批判である。

それ以来ずっとSFを断続的に読み続けているが、なかでも近年圧倒された作品が、ダン・シモンズの『**ハイペリオン**』四部作（早川書房）である。驚天動地のアイデア、胸をえぐる悲嘆、宇宙を駆けめぐる愛、さらに「帝国主義」への憤怒に満ちた、未来世界の「戦争と平和」である。

高校2年の晩秋に、ジャン＝ポール・サルトルの『**嘔吐**』に出会い、その抒情性に胸をしめつけられた。少年愛の現場をおさえられ図書館の守衛に殴られた「独学者」は血を流し「入口の闘には星形の斑点が残った。」この逸話のあと、主人公のアントワーヌ・ロカンタンは、カフェで黒人女の歌うジャズのレコードを聞き、「書く」ことによってみずからの「存在を正当化する」ことを夢見る。いまでも、大気のなかに雨の匂いを嗅ぐたびに、この小説の最後の一節を思い出す。

大学時代に、ドストエフスキーの『**カラマーゾフ**

の**兄弟**』を二度読んだ。人は人生において三度この本を読み、そのたびに三人の兄弟のだれかに自分を重ねあわせるという。もちろん、左翼かぶれしていた青年期には、私も御多分にもれず、無神論者イヴァンに心酔した。その後、多くの人はアリオーシャの清純やドミトリーの情熱に共感するというのだが、老いの近づいた私は、いまこの作品を再読したら、若い愛人に「ひな鳥よ」などとアホな恋文を書き送る淫蕩親爺フョードルに自己同一化してしまうのではないかと、それがコワイ。昨今は「大審問官」のことも知らぬ学生さんが多くてびっくりする。「自由」と「権力」について考えるための出発点となる衝撃的な寓話である。

うわ、もう制限枚数を越えそう。以下に、私が耽読した最愛の作品を羅列する。大江健三郎『**万延元年のフットボール**』、ウィリアム・フォークナー『**アブサロム！アブサロム！**』、開高健『**夏の闇**』。探偵小説は濫読しすぎてキリがないから、省く。一言つけ加えれば、探偵小説の「謎解き」はこのうえない愉悦をあたえてくれるが、「古典」が孕んでいる「謎」には遠く及ばない。いまは谷崎と漱石にハマっている。近代日本のセクシュアリティについて徹底的に考えぬいた、彼らの透徹した知性を畏怖しながら、私も残された時間で「性欲」と「愛」をめぐる人類学的思考の決定版を書きたいものと、ロカンタンのように夢見ている。

（すがわら かずよし）

## 田邊 玲子（人間科学系）

学生時代のこと。一人の友人が、ある思想家なり物事なりの「本質」を取り出すのは簡単だ、と言った。枝葉末節を切り落としてゆけば、根幹が



残るではないか、と。その言葉に対する反発は、いまでもわたしの内に巣くっている。わたしにとって、切り落としても良いような枝葉末節など存在しない。「本質」なり「根幹」なりは、その時々々の価値観が捏造する。だからこそ、つねに「再評価」や「再発見」が行われるのだ。などといっても、単に自分の抽象力欠如を弁解しているだけかもしれないが。切り詰めることが苦手なのは、推薦書を選ぶ場合もそう。幾つかを選び出すなどとてもできなくて、困り果ててしまう。仕方ないので、まずは、筋の展開を「本質」とすれば、見事に「枝葉末節」からしか成り立っていないような小説から。しかし、際限なく肥大してゆく「枝葉末節」こそが、まさに魅力なのである。19世紀イタリアの作家マンゾーニの『いいなづけ(婚約者)』。結婚を目前に控えた若い男女の前にたちはだかる障害の数々。イタリアの「国民文学」となった規範性はさておいて、市井の人々の日常の営みから、ペストの流行、動乱の政治にいたるまで、さまざまな事象が織り合わされて、壮大な時代のパノラマとなっている。ナタリア・ギンズブルク著『マンゾーニ家の人々』は、この作家の「家族」の生き様を描き出して妙。このマンゾーニは、死刑の廃止も主張した『犯罪と刑罰』(1764)で一気に名をあげた刑法学者、チェーザレ・ベッカリアの孫でもある。

1765年、若きゲーテは勉学のためライプチヒに向かう。家に残された妹コルネリアは兄と文通を続ける。兄は、女性の教養を厳しく限定し、妹の生を拘束していった。文芸の才が認められた彼女だったが、兄ほどの高等教育を受ける機会も与えられず、結婚はしたものの、弱冠26歳で産後の衰弱で亡くなってしまう。ジークリッド・ダム著『奪われた才能』はその葛藤を浮き彫りにする。

五味川純平『人間の条件』、大西巨人『神聖喜劇』。日本が行なった戦争の現実。前者は高校の

頃、一学年上の彼に勧められて読んだ。どうしてこのような嫌なものを読ませるのか、と、最初は思った。ひとりの人間の経験世界には限界がある。その限界を破るのが、読書でもある。想像力を養ってさえおけば、直接経験できないことであっても、その現実を押し量り、直視することはできる。ただ、両作品に共通している男と女、あるいは夫婦の絆、というモチーフには、どうもついてゆけなかった。

「自分探し」ということが、よく言われる。でも、「ほんとうの自分」なんて、あるのだろうか。首尾一貫した自己という、近代の虚構の裏側の悪夢を描く、ホフマン作『悪魔の霊液(美酒)』。ドッペルゲンガーの話である。そして、近代の小綺麗に規範化された身体とその背景を問い直す実践を追想するのが、最近出版されたばかりの『土方異の舞踏』、映像を収めたCD-ROMつき。彼の舞台の映像は、西部講堂でも上演され、見に行ったものだ。なにを隠そうその昔、土方異の「舞踏講座」に一日だけ参加したことがある。わたしは「わたし」を脱出することができなかった…。

(たなべ れいこ)

## 富田 博之(自然科学系)

湯川秀樹『この地球に生まれあわせて』講談社文庫

大学教育は専門教育と教養教育の二本柱で成り立っています。このうち専門教育の方は、ある専門に進むためには少なくともこれこれの基礎科目を修得しておきなさいということは、現時点でのある程度のコンセンサスがあってこれを示すことが可能ですが、教養教育の方はなかなかそうはいきません。教養とは何なのか、何が何の役に立つ

のかといったことはさっぱりわかりません。わかりませんが、何十年か経た専門家を並べてみたとき風格というか輝きというかともかく人間としての重み・魅力に歴然とした差をもたらす、そういったものだと思います。

湯川博士は日本で最初のノーベル賞学者であり、京都大学の先輩の一人です。皆さんにとっては今年のセンター試験（物理ⅠA）に登場したように、既に歴史上の人物かもしれないし、私が学生の頃でも既に社会的には神様のような存在になっておられました。私は出身が物理学ですから、学部生のときに先生の難解にして楽勝の講義を受けましたし、院生の頃には理学部物理学教室の私たちのたまり部屋の向かいに先生の教授室がまだ置かれていましたから、皆さんよりは身近に接する機会に恵まれていたと言えます。

湯川博士はお父さん・ご兄弟がすべて学者であり、漢文学から技術系まで、それこそこの総合人間学部を凝縮したような家庭環境で育てられたこともあったと思いますが、ノーベル賞受賞者として日本が世界に押し出して決して恥ずかしくない、深い教養と風格を備えられた学者だったと思います。物理学・自然科学にとどまらず、核兵器廃止から世界連邦運動に至るまで数多くの著作や講演録がありますが、この本はそのことを垣間見ることのできる印象的な本でした。残念ながら手元にあったものは見失い、書店でも見つけることができありませんでしたが、ここの図書館にはちゃんとありました。

ゲーデル『不完全性定理』講談社ブルーバックス  
頭の体操の好きな人におすすめです。文系理系を問いません。人間の論理思考の限界、その限界に挑戦してきた超人の苦闘に触れ、ゾクとした身震いを体験することができます。また、こういうのが現在のコンピュータ科学の基礎とも関連してくると言った方が興味をそそられる人があるか

もしれません。この学部にはそういう分野を専門とする先生もいます。

今では数学の「集合」という概念は高等学校でも習いますが、私たちの頃には確かありませんでした。私は大学に入って間もない頃、書店で時間つぶしをしていて手にした入門書がきっかけになって、しばらくの間、集合論に病みつきになったことがありました。無限大にもランクがあることを知ったときは感激でしたし、今では子供でも知っている「アレフ」という記号に初めて出会います。そのうちに「誰それのパラドックス」といった、それこそクイズのような問題に出くわすようになります。物理に進んでから長い間こんなことは忘れてしまっていたのですが、10年ほど前「ゲーデルブーム」があったときに思い出し、本格的な本はもはや固まりかけた頭ではとうてい歯がたたず、苦し紛れに手にした本がこれでした。

大学院入試の面接で「最近どんなことを勉強しましたか？」と質問すると、ブルーバックスや新書を得々とあげる人がいます。こういう類のもので勉強したと思いきんでもらったら困るんですが、知の淵にはまり込むきっかけを与えてくれるという点では役立つと思いますから、何でもいからそういう悩ましい相手を見つけてほしいものです。

『総合人間学を求めて（1）認識と情報』『総合人間学を求めて（2）生命と環境』京都大学  
学術出版会

旧課程で行われていた学部入門リレー講義を中心にまとめてられたもので、講義そのものが廃止されたため刊行も中止になりましたが、それでもこの学部のかなりの先生が執筆していますので、この学部を知るためにはいい本だと思います。一般の書店では見つけにくいですが、生協「ルネ」店の京都大学学術出版会のコーナーにあります。

新田次郎『ある町の高い煙突』文春文庫

人間の知の力が困難を克服していく過程を描いた、爽快感の残る本でした。

(とみた ひろゆき)

## 富田 恭彦(人間科学系)

よく、「総合人間学ってなんなんだろう」と悩んでいる学生さんの話を耳にします。新しい学部だけでなく、こんな問いをたずねてしまうんです。でも、古い学部だと、例えば文学部の学生さんが、「文学ってなんなんだろう」と、いわゆる文学のことじゃなくて、自分の学部名になっている「文学」について悩んだりすることは、めったにありません。そんなことは気にせず、哲学をやったり、歴史を研究したり、ドイツ文学にいそんだりしてるんですよ。だから、同じように、「総合人間学ってなんなんだ」と思わずに、やりたいことをやってればよさそうなものなんだけど...、そうもいきませんか。それじゃあ、総合人間学に関する私の理解を、少々述べさせていただきます。

総合人間学なんて学問があるわけじゃなくて、総合人間学的「方法」があるんですよ。そう考えてみたら、どうですか。異質な思考がゴロゴロしていて、実に刺激的な学部。その刺激をどう生かすかは、君たち次第なんだけど。その異質なもののせめぎあいの中で、「創造性」というものが機能するんです。

一昔前、この学部ができるときに、当時の文部省宛の文書に、次のように書いたことがあります。少しだけ、引用してみます。

「従来「総合」が言われる場合、それは単に、多様な分野の成果をただ単に「加算的」「寄せ集め

的」にまとめることのみが、意図されていた。これは、「総合」という言葉の本義をないがしろにした用法であると言わざるをえない。「総合」とは本来、異質のもののせめぎ合いを通して、より高い次元での全体的統合がはかられることである。「総合」のこのような原義に戻るなら、諸分野のその都度の成果を有機的に統合すべく行われる努力を通して、これまで気づかれることのなかった全体を見通すための視座が、「創造」という意味において、新たに構築されるのである。この「本来的」「創造的」「積極的」総合こそが、それまでの既成観念から脱して人間が自らのあるべき道を模索するための、唯一可能な方途である。」

硬い文章ですけど、わかっていますよね。総合ってというのは、ある意味では日常的にも多様な仕方で起こっていることなんですけど、そこには新たな考えの創造可能性があるということが、ポイントなんです。ですから、「総合」を貶めて、その上さらに「統合」が必要だなんていう議論を耳にしますと、総合に深く関わる弁証法に思いをひそめたプラトンやヘーゲル、それに、実際に新たな展望を切り開いてきた多くの先人たちが、草葉の蔭で泣いているだろうかと、精神史家のはしくれとしては、ちょっぴり悲しくなってしまいます。

要は、いろんな専門の教官が、同じエリアにこちゃこちゃいて、その一人一人がすごい研究をしている場であるというのが、総合人間学部の最大の特徴をなしているんです。え、じゃあ、どんな研究が行われているかって？以下に挙げる本は、そのごく一部です。

岡田温司『カラヴァッジオ鑑』人文書院 / 篠原資明『トランスエステティーク』岩波書店 / 菅原和孝『感情の猿 = 人』弘文堂 / 高橋由典『感情と行為』新曜社 / 西脇常記『ドイツ将来トルファン漢語文書』京都大学学術出版会

(とみた やすひこ)

## 廣野 由美子（人間科学系）

第一に、本はゆっくり読むこと。時間が惜しくて走り読みしなければならないような本は、それほど読む価値がないのかもしれない。ある一文に目が釘づけになり時がたつのを忘れる。それが本当に「読む」ということであり、そういう力を鍛えてほしい。第二は、日本語だけではなく、英語（外国語）で読書する習慣を、学生時代に身につけておくこと。味読したり繰り返し読んだりする経験は、日本語でも外国語でも基本的に同質であるはずで、いまこそそれを始める時だと思う。

次に、私の専門分野のイギリス文学から数冊紹介する。

ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』（鈴木建三訳、集英社文庫）：Daniel Defoe, *Robinson Crusoe*▶ 18か19歳のころ、クルーソーは両親の反対を押し切って家を飛び出し船に乗る。海賊の奴隷にされたり、ブラジルで農園を営んだり、放浪生活を続けるうち再び航海に出て嵐に遭い……その後のあらまは有名だが、原作を読んでいる人は意外に少ない。クルーソーは近代的人間の類型で、マルクスも「経済人間」と呼んでいるほどの徹底的な合理主義者。デフォーを読めば、イギリスの散文精神とはどのようなものかがわかるだろう。（その他にも、翻案やダイジェスト版でしか知らない文学作品の原作を、是非読み直してほしい。あなたは、『ガリヴァー旅行記』がどんなに凄まじい話か知っているだろうか？）

ジェイン・オースティン『高慢と偏見』（富田彬訳、岩波文庫）：Jane Austen, *Pride and Prejudice*▶ 小説とは人間を描くもの。限られた狭い世界とわずかな題材だけで、どれだけ深く人間が描けるか。オースティンの小説を読めば、それが堪能できるだろう。短調が好みの向きには、

『マンスフィールド・パーク』や『説得』のほう  
が面白いかもしれない。

エミリー・ブロンテ『嵐が丘』（永川玲二訳、集英社文庫）：Emily Brontë, *Wuthering Heights*▶ この小説を読むことは、あなたの生活を根底からくつがえさずにはおかない経験となる  
これはサマセット・モームによるコメントだが、少なくとも私にとってはそのとおりだった。

『オーウェル評論集』1-4（川端康雄編、平凡社）：The Penguin Essays of George Orwell / 『民主主義に万歳二唱』E・M・フォースター著作集11-12（小野寺健他訳、みすず書房）：Forster, *Two Cheers for Democracy*▶ 個人的には、この二人の作家については小説よりもエッセイのほうが好きだ。オーウェルは、飾りを削ぎ取った正確な文章とはどのようなものかを、フォースターは、対象から距離を隔てて眺める批判精神とは何かということを教えてくれる。

補▶ 人に薦められたものでなくとも、あなただけの「眠られぬ夜のために」（同題のヒルティの本はすばらしい）読む本を決めておくと、ストレスを乗り越える処方としてよいだろう（私の場合は、アントニー・トロロープ、アガサ・クリスティ…この辺りにしておこう）。

（ひろの ゆみこ）

## 三原 弟平（文化環境学系）

ぐるりとまわされた「ウバメガシの生垣をひそかに誇りにしている学生もいることだろう」という文章を、井伏鱒二のエッセイのなかに読んで驚いた。そのそばを毎日のように通っていたのに、生垣として見るだけでほとんど気にならなかった自分は、作家というものは目のつけどころが違う

なと思った。これを読んだころは、それでもまだ勢いがあったのだが、ウバメガシは年々老化してゆくようだ。これからこの大学に毎日のように通うことになるだろう若い皆さんに、ウバメガシの老木のようなゆかりの本をまず二冊あげておこう。遠藤嘉基編『芭蕉を読む』(創拓社)、竹之内静雄『先知先哲』(講談社文芸文庫)。

最初の本で、べつに芭蕉についての知見をふやしてほしいというのではない。これは、今ではまず行けない対談のようすを筆に起こしたものだ。が、歓談しあうこの大学の先生たちのあり方を知ってもらいたいと思ってあげた。二冊目はまさにタイトルどおりの内容の本で、今の皆さんには最もふさわしい本かもしれない。いずれも今では絶版になっているようだが、手にする幸運を得られたら、ぜひ読まれることをお勧めする。かつてはこうした人たちがこの界隈を歩き来していたのだと知ることは、無意味ではなからう。

が、とくに最初の本などをあまりに太平楽だと思われる人には、もう少し深刻な本を二冊。学生時代には物事の基本となる重厚な本を、端折らずに隅から隅まで読まれることをお勧めする。そうすれば、思いがけない人たちが、じつはそうした本から発想をえていることがわかり、いろんな言説が飛びかうなかにあっても幻惑されることが少なくなるだろう。そうした方向定位の本としてお勧めするのはハナ・アーレント『全体主義の起原』(みすず書房)とアンリ・エレンベルガー『無意識の発見 力動精神医学発達史』(弘文堂)である。アーレントの本のあとでサイドの『オリエンタリズム』(平凡社)を読まれるのも、相乗効果があっているかもしれない。また、大部なエレンベルガーの論述を読んだあとで、自分に向いた精神医学者の本に入っていけるといいのではないかな。

最後に馬脚をあらわすようではずかしいが、自

分の個人的な体験を告白して締めくくりとしよう。皆さんにはそれぞれに「セキュリティ・ブランケット」にあたるような本があるのではないかなと思う。そうした本など持たずに生きてこられたといわれる人は、それはそれで慶賀すべきことかもしれないが、若いころの自分には漱石の『我輩は猫である』がそうした本だった。この本一冊だけをもって京都にやって来たのである。入学当初は冒頭の一句が頭をよぎれば、たちまち以後の数節が口をついて出てくるくらいまでに読み込んでいたのだが、大学に入って一年もたつうちに、この本にまったく手をのばさなくなった。「セキュリティ・ブランケット」の役を終えたのだ。それから漱石のものはいくつか読んだが、数ある彼の文学論のなかでお薦めするのは『文学評論』(講談社学術文庫、岩波文庫)である。行き会わずいぶん長い回り道をしたが、これは若いころの自分の「ただ一冊の本」と、表裏をなす本だった。

(みはら おとひら)

## 宮下 英明(自然科学系)

自然環境の保護・保全の必要性・重要性とは何か?それを誰にどう伝えるか?これらは「環境」にかかわる者すべての課題であり、答えは多様である。そこでまず、『生きもの、みんなと友だち』ジャック・T・モイヤー(フルーベル館)をお薦めしたい。ほんの1時間程度で読み終えてしまう子供向けの本である。故ジャック・モイヤー博士は、三宅島の海をこよなく愛した米国人であり、「一番力のあるオスがメスに性転換して種の保存をはかるクマノミの性転換」を筆頭にさまざまな海の動物の不思議を発見された著名な海洋生物学

者であり、また環境保護活動の先駆者でありシンボルでもあった。この本には、モイヤー博士の自伝とともに、自然や動物保護のあり方に関する深いメッセージが含まれている。そのメッセージとは、「海は面白い、海はすばらしい、海は大切だ。この3つを十分に体で感じた子どもたちは、将来、海の環境をまもるために、きっと活躍してくれるでしょう。」ということばに表され、自然環境を守り育てる若者を育てることの重要性を説くものである。博士はそれを実践するプログラムも主催していた。[『子どもは海で元気になる 実践・海洋自然教育』ジャック・T・モイヤー、海野義明、中村泰之(早川書房)] また、モイヤー博士が、チンパンジー生態学研究の第一人者であるジェーン・グドール博士とともに書かれた本『森と海からの贈りもの 二人の「自然の使者」から子どもたちへ』ジェーン・グドール、ジャック・T・モイヤー(TBS プルタニカ)には、2人が自然環境や動物の保護の推進には、自然や環境に接し、学び、考えるプログラムを子供達に提供することによって彼らの原動力をかき立てることが必要であるという共通の認識をもっていることが書かれている。彼らのメッセージを皆さんはどう受け取るだろうか？

自然環境の保護・保全は、その環境の面白さ、すばらしさを体で感じ、その大切さを認識することにはじまる。海の生物に興味があれば、まず、図鑑を手に磯歩きをしてみたらどうだろうか。磯はいろいろな生物に出会うことのできる最良の場所である。テキストには『日本の渚 失われゆく海辺の自然』加藤真(岩波書店)をお薦めする。南の海に出かけるのであれば、『サンゴ礁の渚を遊ぶ 石垣島川平湾』西平守孝(ひるぎ社)が参考になると思う。石垣島川平湾を例に、磯で何をどのように観察すれば良いか示唆に富む本である。まずは、自分の五感と感性で自然やそこに棲

む生物を捉え、「未来に何を残したいだろうか。そして、それをどう実現するか？」を自問自答してみてはいかがか？また、研究として地球環境を対象とするのであれば、『地球環境学のすすめ』(京都大学地球環境学研究会編、丸善)を読んで、君なりの環境学の世界に踏み込んでみては？

その他

東京大学海洋研究所編集『海の生き物100不思議』東京書籍

畠山重篤『森は海の恋人』北斗出版

松永勝彦『森が消えれば海も死ぬ 陸と海を結ぶ生態学』講談社ブルーバックス

イボンヌ・バスキン『生物多様性の意味 自然は生命をどう支えているのか』藤倉良訳、ダイヤモンド社

(みやした ひであき)

## 森谷 敏夫(認知情報学系)

1. 五木寛之『大河の一滴』幻冬社
2. 梅原猛、日比工『魂の言葉』PHP研究所
3. エレン・ラペル・シェル『太りゆく人類』早川書房
4. 吉田俊秀『肥満遺伝子がわかった』ゴマ書房
5. 正高信男『ケータイを持ったサル「人間らしさ」の崩壊』中公新書

(もりたに としお)

## 吉田 純(人間科学系)

自分自身の学生時代以来の本とのつきあい方を振り返ってみると、そこに何の体系性・一貫性も

見いだされないことに愕然とせざるをえない。もちろん「勉強」の必要上、体系的に読まなければならない本もあるわけだが、後々まで記憶に残り、なんらかの形で「糧」となるのは、ほとんどの場合「偶然」に出会った本であったように思う。そうした気ままな「乱読」が許される学生時代という貴重な時間を大いに活用してほしい。以下に挙げた本は、たまたま現時点で気にかかっている本のなかから思いつくままに、学生諸君との多面的な「出会い」の可能性をもっていそうな本を選んだものである。

- ・見田宗介『宮沢賢治 存在の祭りの中へ』岩波現代文庫

宮沢賢治の言語は、世界（空間と時間）を絶えず「すきとおらせる」ことによって、新たな「世界」像とそのなかにいる「自己」像とを開示しつづける。著者独自の視点からの縦横自在な引用が、そのような言語的宇宙への旅に読者を誘う。

- ・斎藤茂吉『万葉秀歌』上・下、岩波新書

「万葉集」の魅力の本質は、日本語という一言語が、それが表現し開示する世界の広がりとともに生成されてくる場面のドキュメントという点にあるように思う。近代に付加された「万葉の国民性」のような言説に一切拘泥せず、詩的技法と歴史的文脈のみに専念した評釈が、その生成の様相を浮かび上がらせ、著者の時代的制約を超えた普遍性をこの選集に与えている。

- ・網野善彦『「日本」とは何か』（「日本の歴史」第00巻）講談社

この二月に世を去った歴史家の、中世史という専門を超えたパースペクティヴの広がりを一望しうる本。「日本」のアイデンティティを根底から問いなおす一貫した視点が、旧来の「地域」や「時代」についての「常識」を解体していく。

- ・デイヴィッド・ライアン『監視社会』河村一郎

訳、青土社

「情報化社会」とは、人間を監視する「まなざし」があらゆる空間に遍在する社会である。重要なのは、この社会に住むわれわれ自身が、意識するとせざるとに関わらず、この「まなざし」の客体であるのみならず主体でもあるという点である。「情報化社会」における倫理や政治への問いは、このことの認識から出発せざるをえない。

- ・ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫

本書は二十世紀政治哲学の古典であると同時に、「情報化社会」「監視社会」としての現代におけるきわめて切実な問い、すなわち、人間がそこに自由に「現れる」空間、人間と人間との「共通の」世界としての「公的領域」はいかにして成立するのかという問いを提起する。

- ・ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション』全3巻、浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫

自身が生きた二十世紀前半のドイツを足場として西欧近代に内在しつつ、ミクロな私的記憶とマクロな歴史的記憶とを往還させながら、批判的思考をつむぎつづけた特異な思想家のアンソロジー。それはわれわれの生に「意味」を与えるのではなく、むしろ「意味」が生成される根源へと読者を連れ戻す。

（よしだ じゅん）

## ヨリッセン エンゲルベルト （文化環境学系）

大学の学部生時には、わたしはイタリア言語と文学をおもに勉強しました。そして、他のロマンス語の授業にも参加し、日本学なども勉強しまし

た。そして次第に、ポルトガル語の文学にひかれていきました。お世話になった先生の影響もありますが、何より大学に「ポルトガル・ブラジル研究所」があったことが大きな要因でした。

学生時代から、ポルトガル人の領土拡張と布教活動には興味を抱いていました。そして、旧ポルトガル植民地でのポルトガル語で執筆される文学にも関心を広げていきました。それらの文学は、たとえば、英語の場合でもそうですが、ポルトガル文学というよりも「ポルトガル語の文学たち」と複数形で言わなければなりません。ポルトガル語の場合には、本国の文学以外に、ブラジル、アンゴラ、モザンビーク、カボ・ヴェルデ、ギニア・ビサウ、サントメ・プリンシペ、マカオ、ティモールなどの文学があります。

わたしにはまだまだ読まなければならない本が数多くありますが、今までの体験から次の本をお奨めしたいと思います。

Alessandro Manzoni, *I Promessi Sposi* (1827), a cura di Lanfranco Caretti, Roma, Bari, Laterza (1970), 1974. 日本語訳：アレッサンドロ・マンゾーニ著、平川祐弘訳『いいなづけ』上・下、河出書房新社(1991)

\* 19世紀初期の歴史小説。17世紀の北イタリアが舞台です。結婚にまつわる出来事がバロック時代の社会背景のもとに語られます。

Umberto Eco, *L'isola del giorno prima* (1994), Milano, Bompiani, I Grandi Tascabili, 1996. 日本語訳：ウンベルト・エーコ著、藤村昌昭訳『前日島』文藝春秋(1999)

\* これは17・18世紀のストーリーです。主人公

の一人は北イタリアとパリから南太平洋に「流れて」しまいます。小説を書くことについての小説でもあります。

José Saramago, *Memorial do Convento*, Lisboa, Editorial Caminho, 1982.

日本語訳：ジョゼー・サラマーゴ著、谷口伊兵衛・ジョバンニ・ピアッツァ訳『修道院回想録 パルタザルとプリムンダ』而立書房(1998)

\* 18世紀ポルトガルのマフラの修道院建設の話です。「カーニヴァル」化され文章に彩られたピカレスク風の歴史小説ともいえます。

Pepelela(本名はArtur Carlos Maurício Pestana dos Santos), *Mayombe* (1980), Lisboa, Publicações Dom Quixote, 7.1999.

英語版がMichael Wolfers訳でハイネマン社(Heinemann, 1996)から刊行されています。

\* ポルトガル語で書かれたアンゴラの小説。ポルトガルに対する1960年代と1970年代前半の植民地闘争が語られます。アンゴラの様々な民族や言葉などの問題、植民地戦争とジェンダーの問題なども扱われています。

Arundhati Roy, *The God of Small Things*, New York, Random House, 1997. 日本語訳：アルンダティ・ロイ著、工藤惺文訳『小さきものたちの神』DHC(1998)

\* 1969年の西南インドのケララ州で始まる話です。社会と宗教や政治、男性と女性に関する問題などが、ある家族の悲劇を通して語られます。また、インドの植民地時代がいかに現在のインド社会を規定しているかなども描かれます。

(Jorißen, Engelbert)



# 卒業生からの声

## 総合人間学部で得たもの

平成9年度自然環境学科卒 早川 奈美



総合人間学部2期生として4年間の学生生活（及び人間・環境学研究科での2年間の院生生活）を終え、社会に出てから4年が過ぎた。今回、「総合人間学部生にメッセージを」との依頼を頂いたわけだが、今だからこそ感じる総合人間学部の特色について私なりに整理し、後輩のみなさんへのメッセージとしたい。少しでも参考になれば幸いである。

私が数ある大学の数ある学部の中から総合人間学部を受験しようと決めた理由は、恥ずかしながら、学部及び学科の名前（と少しは理念）に惹かれてきたように記憶している。当時は漠然と環境に関わる勉強や仕事がしたいと考えていたため、自然環境学科という学科名と、総合的な学問体系を目指すという学部の理念に惹かれたのである。結果的には4回生及び修士時代に望むような研究をすることができ、環境コンサルタントという当初の希望どおりの仕事につくことが出来た。一方で、在学中は、学部の理念である総合的な学問という意味では物足りなさを感じていた。みなさんは如何だろうか？同様に学部の名前や理念に惹かれて受験したものの、現実とのギャップに失望している人も少なくないのではないだろうか。

私もその1人であったが、今仕事をするようになって振り返ってみると、総合人間学部での4年

間の学生生活で得たものは非常に大きかったと思う。視野の広さや考え方の柔軟性では他学部生には負けないし、総合的な考え方のできる素地のようなものは着実に育っていたと確信する。仕事をする上で役立つのは、専門知識より、こうした素地である。

分野間の垣根の低さ、先生と学生の距離の近さは、総合人間学部の大きな特色である。

今になって思えば、学生時代には、明確な目的はあまりなく、興味のおもむくままに副専攻を始めとする他分野の授業を受けていたが、授業を通して、あるいは友人を通して他分野の先生や学生との日常的な交流が数多くあった。このような交流を通して、知らず知らずのうちに視野を広げ、総合的な考え方のできる素地を作り上げる事ができていたのではないかと。こうした交流こそが総合人間学部ならではの醍醐味なのかもしれない。

「求めるものは与えられる」制度は整っている。総合人間学部の場合、特に、何を学び何を得るかは自分次第であるように思う。明確な目的があれば、その目的に添った総合的な学問体系を自分自身で作り上げていくことも可能だ。後輩のみなさんには、ぜひこれらの総合人間学部の特色を十分に活用して、実りある学生生活を送ってもらいたいと思う。

株式会社 島津テクノロジーサーチ勤務  
(はやかわ なみ)

## 取りえのない自分にもできる仕事

平成10年度国際文化学科卒 内藤 尚志



「顔の見える国際貢献をしていかないといけな  
い。いまのイラクでそれ  
ができるのは、自らの安  
全を自ら守ることのでき  
る自衛隊だ」

2月23日、神奈川県  
議会の本会議。松沢成文

知事がそう答弁すると、松沢知事と長く対立状態にある自民党県議たちもざわついた。何人かが「よし」「その通りだ」と声をあげたのが、2階の記者席にいても、はっきり聞こえた。

外交は、国の仕事だ。知事一人が何か言って外交が動くわけでもないし、外交政策を決める権限もない。ただ、イラク派遣は世論を二分する問題。知事の影響力は県内では大きく、世論だって動かしかねない。それに「地方分権」の時代だから、これから知事の権限はますます大きくなる。私たちが選んだ知事が、日本という国の今後のあり方をも左右する問題についてどんな考えなのか、有権者は知っておく必要がある。

そう思い、「自衛隊イラク派遣、知事が支持を明言」という記事を地方版に書いた。記者席には他社の記者も10人ほどいた。記事にしたのは、私のほかは3人だけだった。

新聞記者の仕事は単純だ。人の話を聞いて、文章にするだけ。専門的な技術や知識がなくても務まる。

では、記者に求められる「能力」はないのだろうか。強いていえば「何に驚き、何をおもしろがるか」。そういうセンスのようなものだと、私は考えている。そこに記者の個性や、力量の差も表れる。

知事の評論家的な発言に貴重な紙面を割くのは

もったいないと、記事にしないのも一つの判断だし、そちらの選択のほうが賢明だったかもしれない。ただ、私がああ発言を記事にしなければ、松沢知事の自衛隊や国際貢献に対する考え方を、多くの人には知る機会すら持てなかっただろう。

自分が「おもしろい」「すごい」「ひどい」と思ったことを、自分一人にとどめておくのはもったいないから、多くの人に知ってもらおう。そんな動機で続けていけるこの仕事に、いまはやりがいを感じている。

活字が好きで、いろいろなところに出かけるのも好きだから、新聞記者になりたいとずっと思っていた。他の業界には目もくれず、ひたすら新聞社を受験した。

総合人間学部国際文化学科現代文明論卒業という分かりづらい肩書は、就職活動ではおそらくマイナスだった。面接で「君は何をしてきたのか」と突っ込まれる。さらに、私の履歴書をみて「君は資格も持っていないし、たいした趣味もない。何が取りえなのか」と聞かれ、「取りえはありません」と答えたことも。法律や経済を学んでいれば、「自分にはこれだけ役に立つ知識がある」と、アピールできたのだろう。

でも、総合人間学部に入って損をしたとは思っていない。おかげで、「自分は何を学びたいのか」と、他学部の人より深く悩んだと思う。そのなかでインドネシア文学という興味深いテーマに出会って卒論を書けたし、こんなにすばらしいものが世にあまり知られていない悔しさから、それを伝えられる記者への思いをさらに強くすることもできた。

みなさんも大いに悩み、好きな仕事に就いてください。

(ないとう ひさし)

## 生協のコピーカードは損か得か

平成10年度国際文化学科卒 早崎 永治



表題に挙げた問いについて、僕は二度友人と議論したことがあります。皆さんはどう思いますか。

急いでいる時や小銭の無い時は、構内でさっとコピーできて便利です。図書館内では確か、コピーカードでしかコピーできないです。また、高額のを買うと、いくらかおまけでコピーできるようになっています（大学周辺には安いコピー屋があるにせよ）。こう考えると、コピーカードは十分に便利なような気がします。でも、コピーカードをコンビニで使うことはできません。また、コピーカードでおにぎりは買えません。やはり現金を持っている方が、得することが多いでしょうか。

これは例えばハイウェイカードや商品券、いわゆる「地域通貨」などにも通底する問題ですし、「貨幣」というものの性格を考えるヒントにもなるかもしれません。ただ、ここで言いたいのはどちらが正しい、ということではありません。僕がこういう別に気にする程でもない問いについて、サークルの友人とバイト先の後輩、二人の人と考え話し合った、ということの方が、大学生活を語る上で大切であるように思います。

実際、本当に多くのことで話し合ったものです。ゼミや研究室だけではなく、サークルボックスやバイト先で、あるいは食卓や酒を囲みながら。話題も個人的なことから、サークルや店の運営のあり方、オウム真理教などの社会問題まで多岐に渡りました。そして、いい加減なこじつけや他人

の考えの引用では、誰も納得してくれなかった。自分で考え、論理立てて説得することが（十分にできるかは別として）、そこでは常に求められていたように思います。

飽くまで僕個人のこととして思うのですが、高校までの僕は、与えられた、限られた世界の中で生きてきたような気がします。京都での八年間は、その生活の隅々までが、僕を一人の「人間」にしてくれた培養基のようなものでした。そこで身に付けたのは、酒の飲み方や自炊の仕方から、今後の仕事につながる社会への目まで、本当に多くのことです。そしてその過程で、自ら考え、人と話し合うことがとても大切だったと思うのです。

今ようやく就職して日々働いているのですが、一見くだらないと思われることについて、徹底的に話し合うことは少なくなりました。職場の人との間で余りむきに（時に殴りあう程に）なってしまうのははばかれるというのもあります。大学という場所は、そこまでできる人と時間、そして雰囲気恵まれていたのだな、と思います。

今、こうしておけば良かった、だから皆さんにこれはやってほしい、と思うことはたくさんあります。ここに書いたのはそのうちの一つです。無論、何もかもできる人はいないし、絶対に後悔しない大学生活など僕にはわかりません。ただ、大学にいてだけで満足せず、大学の場と人を、自分で考えて積極的に利用していく姿勢を、皆さんには持ってほしいと思います。

平成14年度 京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程中退

（はやさき えいじ）

## 忍耐、努力、感謝



タイトルは私の会社の創業者精神です。戦前戦後の日本を駆け巡り一つの文化を築いた先人の言葉を、社会人になって1年足らずの若輩者が使うのもいささか気が引けますが、私の大学時代、そ

して社会人生活はこの言葉に尽きるような気がします。

大学では体育会のソフトボール部に所属し、選手として3年間、監督として1年間活動しました。毎朝授業が始まるまで練習し、休みの日も試合や遠征などで、大学時代の大半はソフト部の仲間と過ごしたのではないのでしょうか。目標であった1部リーグ昇格を果たした時に、吉田グラウンドでビールかけをしたのは今でもいい思い出です。しんどい練習や失敗した時のつらさ、真剣であるが故のもめごともありましたが、そこで培ったことや仲間は今でも自分の財産で、充実した大学生活を送れた一つの大きな要因だったと言えます。1、2回生のみなさん、ぜひ体育会に入られることをお勧めします！

誤解を招かないように学業の話に移りまして、総人では物質環境論講座に所属し、日本・中国の文化と社会を副専攻としました。総人のメリットとして少人数で教官と密になって実験や演習ができるのが大きいと思います(その分プレッシャーも大きいのですが...)。そのおかげもあって、総人を志望した当初の目的「物知りになりたい!」も若干達成できた気でいます。研究室では、日本の河川における化学成分の分布と長期的な変遷について研究しました。自分の研究には、徹夜での採水試料の濾過や地道なデータの蓄積が不可欠でしたが、半世紀もの間滞っていた日本全域にわた

平成12年度自然環境学科卒 佐々木 淳也

る河川水質のデータについて、環境が大きく変わった今との違いを発見し、新しいデータとして提示できることにとてもやりがいを感じました。その中でもやはり、悩んだ時にお酒を飲み連れて行き届まして頂いた指導教官や、夜遅くまで一緒に濾過をしてくれた研究室の先輩や後輩の支えがありました。

充実した大学生活を送れた中には多くの人の支えがあり、さらには親のありがたさをも実感できました。感謝の気持ちはなかなか表現しづらいものですが、その気持ちを忘れずにいるだけでも十分な恩返しになるような気がします。また、「忍耐」し「努力」する者にとって、「感謝」できる相手がいることは何よりの癒しになると私は思っています。

現在私は、工場に配属され製造の現場で機械や電気と格闘しています。大学時代の専攻とは全く違う不向きなことに毎日取り組み、新しい知識を身につけなければならない、まさに「忍耐」と「努力」の日々です。ただ、モノづくりの現場にいと、スーパーに行っても自分の作った製品が気になったり、何よりメーカーに勤める上で最も大切な「お客様への感謝の気持ち」が入社1年目にして早くも身につけてきています。また私はある意図を持ち、一つのステップとして社会人になることを選択したのですが、希望通りの研究職ではなく工場配属になってとてもいい経験ができていと実感しています。今後さらに勉強し経験を積んで、何か会社に恩返しできるようなこと(例えば特許を取るとか、品質を向上させる等)を残せるように頑張りたいと思っています。

平成14年度人間・環境学研究科修士課程修了  
UCC上島珈琲株式会社 生産・購買本部勤務  
(ささき じゅんや)

## 研究・教育活動紹介

### 私の研究歴・研究内容について（自己紹介にかえて）

齋藤 治之（認知情報学系）



今年の4月から大学院人間・環境学研究科、総合人間学部に着任しました齋藤治之と申します。出身は東京で、地元の都立白鷗高校（浅草）を卒業後、東京大学文科三類に入学しました。私の研究の出発点は学部時代の

古高ドイツ語研究であり、古高ドイツ語の基本的文献である *Tatian* における接続詞のラテン語の影響による体系化を扱った *Der Einfluß des Lateinischen auf die Nebensätze des Althochdeutschen* というテーマの卒業論文を1976年東京大学教養学部教養学科ドイツ分科に提出しました。東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻課程においても古ゲルマン語研究を継続し、それは今年3月まで勤務したフェリス女学院大学（横浜）において教員生活を始めた後も同様でした。このようにして、古高ドイツ語の諸文献 *Otfrids Evangelienbuch*, *Notker* を中心に、他のゲルマン諸語の文献 *Heliand*, *Beowulf*, *Edda* 等の精読と研究テーマである接続詞の用例の収集を行い、この作業を通じて *Otfrid*, *Notker*, *Heliand* における接続詞および従属文に関する研究論文を作成しました。

他方、1986年から87年にかけて1年間留学生活を送ったドイツ・ザール州立大学では独文学科のみでなく印欧語比較言語学の授業にも出席してドイツにおける印欧語比較言語学の方法およびゲルマン語以外の諸言語に触れることができました。その中でも中央アジアの印欧語族の1言語であるトカラ語は、例えば、トカラ語祖語に推定される重複動詞（過去第2類）のA・B両方言における重複の有無（A 重複、B 重複に代わる語幹母音の延長）が東・北・西ゲルマン語における過去第7類の重複の有無（東 重複、北・西

重複に代わる語幹母音の延長）と合致する、というゲルマン語と類似した言語現象を示し、特に私の興味をそそりました。このようにして印欧語比較言語学、特にトカラ語とゲルマン語の重複動詞の歴史的關係および重複動詞同様重複を示す過去分詞の起源と用法の研究、はその後古ゲルマン語文献研究と並ぶ私の研究の両輪となりました。

このように、印欧語比較言語学の領域では、トカラ語 *Berliner Sammlung*（ベルリン写本）における過去分詞の全用例収集によるその用法の研究とトカラ語動詞組織の歴史的發展、特に重複動詞（過去第2類）の起源を中心に研究を進め、昨年5月には、1998年から99年にかけて1年間留学生活を送ったヨハンヴォルフガング・ゲーテ（フランクフルト）大学の比較言語学科に *Partizipia Präteriti im Tocharischen*（トカラ語における過去分詞について）という題名の博士論文を提出しました。

古ゲルマン語研究では、接続詞・従属文という従来のテーマと並んで印欧語比較言語学の方法を取り入れた『ラリungal理論とゲルマン語の弱変化動詞』、『インドヨーロッパ語族におけるパーフェクトとゲルマン語派における過去現在動詞について』のような論文を執筆し、また、古高ドイツ語作品の中でも以前から主として取り組んでいた *Notker* による作品の一つである *Martianus Capella: De nuptiis Philologiae et Mercurii*（メルクリウスとフィロロギアの結婚）の訳注書を1997年出版しました。今後は、印欧語比較言語学の見地からのゲルマン祖語を出発点としたゲルマン語の歴史研究、とりわけゲルマン語の動詞組織の歴史的發展に取り組んでいきたいと思っています。

私は歴史的なものに特別の愛着と関心を抱いており、これから始まる古都京都での生活を大いに楽しみにしています。

（さいとう はるゆき）

## ゲニザ文書 エレツ・イスラエル学 ピユート研究

勝又 直也（文化環境学系）



現代イスラエルにおけるピユート（中世ヘブライ語典礼詩）研究の基礎を築き上げた第一人者であるメナヘム・ズライは、エレツ・イスラエル学派が生み出した代表的な学者の一人である。彼

は、1930年代初頭にベルリンに設立し、間もなくエルサレムへと移転した「ヘブライ詩研究所」の中心的な研究員であった。ガリシア生れのズライにとって、当時イスラエルの地にて、日常会話においても文章においてもヘブライ語がまさに復活しつつある光景を目の当たりにしたことは、彼のピユート・ヘブライ語への関心と愛着をさらに強めた。中世においてユダヤ人が世界各地に離散する以前に、イスラエルの地において彼らが育んだヘブライ文化を、ズライはピユートにおいて見出したのである。そして、このことをありありと示してくれるのが、19世紀末にカイロで発見されたゲニザ文書の中に保存されている大量のピユートの古い写本なのである。これ以降、ゲニザ文書 エレツ・イスラエル学 ピユート研究というのは切っても切れない関係にあり、エルサレム・ヘブライ大学は常にこの分野で世界の中心であり続けている。私は、東京大学卒業後、ヘブライ大学にて約10年間研究に従事し、ピユートの分野で博士の学位を取得した。日本においては殆ど知られていないこの魅力的な分野の研究・教育を、今後は京都大学を拠点として、さらに推進していきたいと思っている。以下はその一端である。

紀元5、6世紀からエレツ・イスラエルにて創作され始めたピユートは、どのような経路で現代の我々のもとに伝わってきたのだろうか。ゲニザ文書発見以前は、それは主にアシュケナズと呼ばれる中部・東部ヨーロッパのユダヤ人における典礼伝統によって伝えられた。度重なる迫害のため

エレツ・イスラエルを去り、北方へと集団で移住していったユダヤ人は、同時にピユートのテキストもヨーロッパへ持ち込んだ。最初の目的地はギリシャであり、その後はイタリア、さらにライン川流域へと進んで行き、ここから、西部のフランス、東部のアシュケナズと分岐する。古代末期のビザンツ・ギリシャ時代や、その後のイスラーム時代のエレツ・イスラエルにおいて創作されたピユートのテキストを多く保存しているのが、アシュケナズのユダヤ人の祈禱書なのであり、これは今日においてもシナゴグで使われている。

このアシュケナズの伝統において最も重要なピユート詩人（パイタン）は、7世紀エレツ・イスラエルにて活動したエルアザル・ピラビ・カリールである。言葉遊びを多用し、しばしば意味の理解を犠牲にしてまでも音声的側面を重要視するヘブライ語で書かれた、カリールに代表されるエレツ・イスラエル起源のピユートは、啓蒙主義時代のヨーロッパのユダヤ知識人にとっては、ユダヤ教における古めかしく形骸化したもの全ての象徴とみなされた。Ats Qotsets Ben Qotsetsという言葉で始まり、詩全体がtsの音で溢れている、カリールのあまりにも有名なピユートをもとに、1888年、メンダレ・モヘル・スファリームは、パイタン達のことを揶揄してmitatsqotsetsimという造語で表現している（ヘブライ語文法において、再帰などの意を持つ動詞態であるhitpaelという形に、Ats Qotsetsをあたかも語根として組み込んだもの）。

しかし、19世紀末に発見されたゲニザ文書は、我々のピユート観を全く変えてしまうことになる。ゲニザ文書とは、旧カイロ・フスタートのシナゴグ「ベン・エズラ」にて発見され、現在はケンブリッジ、オックスフォード、ロンドン、パリ、ニューヨーク、ペテルブルグなど世界各国の図書館に散在しているものである。これは、直接的には9 - 12世紀カイロのユダヤ人共同体に関わ

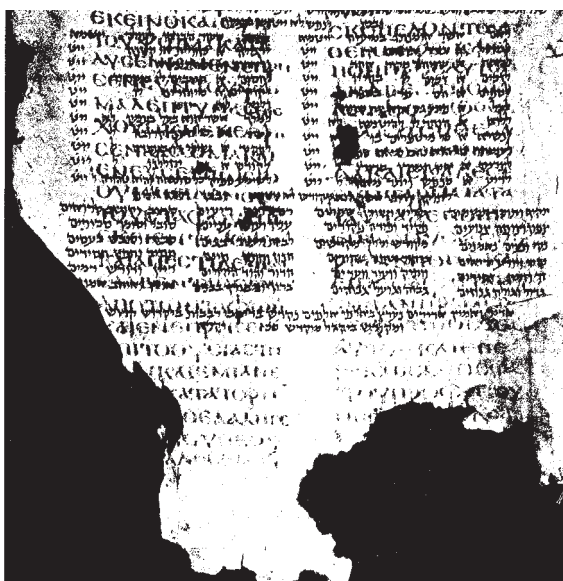
る資料であるが、広くは中世地中海・中東社会に生きたユダヤ人、さらには同じ社会に生きるムスリムやキリスト教徒たちが、何を考え、何を信じ、そしてどのような日常生活を送っていたかを生き生きと浮き彫りにする資料でもある。

ユダヤ人は、ヘブライ文字で書かれたもの全てを神聖視する伝統にもとづき、不必要となったヘブライ文字の写本を捨てずに、ゲニザと呼ばれる古い写本を保存するための場所にしまっておいた。エジプトの乾燥した気候のおかげで、ゲニザに放り込まれた何十万という写本が、腐食することなしに保存されたのである。さらに注目すべきは、シャームユーンと呼ばれるこのシナゴグのユダヤ人は、エレッツ・イスラエルから移住してきた人々の子孫であった。ゲニザ文書全体の実に40パーセントはピユートや祈祷書の断片であると言われているが、その中から、エレッツ・イスラエルで創作されたピユートが大量に発見されたのは、このような理由による。ゲニザ文書の発見により、ユダヤ人がまだ定住していた時代のエレッツ・イスラエルにおいて、聖書からミドラシュ（聖書解釈）、そしてピユートへと続く、豊かでオリジナルなヘブライ文化の存在を知ることができるのである。

私の仕事の90パーセントは、ゲニザ文書によるピユートのテキストの校訂である。ある詩のテキストを校訂するためには、まず世界中に散らばっているゲニザ文書の中で、どこにその詩の写本

があるのかを知らなくてはならない。一つの詩の写本がばらばらにちぎれて、例えば、一つはニューヨークに、もう一つはペテルブルグにある、などということは普通である。エルサレム・ヘブライ大学には、世界中に散在しているヘブライ文字で書かれた写本の全てのマイクロフィルムが収集されているので、日頃はそこで研究することになる（エルサレムに滞在していた10年間はそうしてきたが、日本に帰ってきた今となっては、もうこれも夢物語である）。ケンブリッジとオックスフォード、あるいはニューヨークとペテルブルグの写本のマイクロフィルを見比べながら解読できるのは、やはり大きな利点である。しかし、マイクロフィルムの状態が悪く、解読が不可能な場合には、その写本を保持している図書館に旅立たなくてはならない。ところで、ヘブライ大学の写本館で世界中の写本のマイクロフィルムを回転させることに満足して、実際に世界の図書館を訪れ、写本の現物を解読することを面倒に思う研究者もいるが、1000年前に書かれた写本を手にとって、その臭いを嗅ぐことは、研究上も大切な経験だと思ふ。ゲニザ文書という膨大な数の資料を目の前にして、ピユートの研究者は、新たな発見へ大いなる期待を寄せると同時に、その課題の大きさに圧倒され、時には全てを投げ出したくなることもある。それでも研究をやめられないのは、ピユートに対する深い関心と愛情があるからである。

（かつまた なおや）



パリンプセスト：聖書のギリシャ語訳（6世紀）の上  
に書かれたヘブライ語の詩（10世紀）  
T-S 20.50 (Cambridge University Library)

人間・環境学研究科  
総合人間学部

広報委員会